



「知的財産の創出とそのための課題考」

For Creating of Intellectual Property and Its Background

総合科学技術会議議員・東北大学名誉教授

阿部 博之
Hiroyuki ABÉ

Member, Council for Science and Technology Policy, Cabinet
Office Professor Emeritus, Tohoku University

1. 知的財産とは

知的財産は、人間の創造的活動により生み出されるものすべてである。そのうち、法的対象として選ばれているものが知的財産権であるが、長い目で見れば固定されたものではない。

知的財産戦略は、海外の動向への対応を含め多岐にわたるが、何といたっても知的財産の優れた創造が前提であり、本稿はそこに焦点を当ててみたい。

2. 知的財産の創出に向けて

優れた知的財産への評価の代表格がノーベル賞であろう。個々のノーベル賞の実現のために、集中投資など国が動くことには批判があるが、ノーベル賞の対象になるような優れた基礎研究を生み出す環境を整備したり、学生はもちろんのこと、子供たちが科学技術をより志向する社会を作っていくことは大切である。

ノーベル賞に加えて、大きいイノベーションに通じる研究も、一般に関連する基盤的科学技術の進展に負うところが大きい。すなわち、ノーベル賞が直接対象になる分野に限らず、このような基盤的分野の成果をきちんと評価していかなければならない。

イノベーションについていえば、第一期（1996-2000）、第二期（2001-2005）の科学技術基本計画の間、数千億円以上の市場が約束されている事例、また多数の罹患者に福音を与える、難病に対する画期的な治療例などがいくつか出現した。イノベーションは、後追い型、改良型を基調とする従来のがわが国の産業構造を21世紀型に変えていくインパクトを有しており、第三期以降このような事例を等比級数的に増やしていくことが強く望まれている。

ところでわが国が、このようなイノベーションを醸成していくことに適した環境にあるだろうか。結論は、いまだ不十分といわざるを得ない。

第一に、わが国独自の優れた発見、発明についてである。それらは、世界的に極めて関心の高いテーマの場合もあるし、ほとんど関心もたれていないテーマの場合もある。とくに後者の場合に多いが、最初米国などで高く評価され、後にわが国で追認される例がいまだに少なくないのは残念なことである。

福沢諭吉先生はすでに明治初年、“古来、文明の進歩は少数者の異端妄説から生まれるのではないか、”

と著書“文明論之概略”¹の中で述べているが、この言葉を嘔みしめ、本物を抽出し、支援していく慣行を作っていかなければならない。

第二はその後の展開である。優れた発見、発明も直ちにイノベーションにつながらず、一定の年数が経過すると、一般に逆境に入る。いわゆる死の谷と呼ばれるものはこれに当たる。理由は様々であるが、例えば産業技術として未成熟である場合、とくに周辺技術の進歩を必要とする場合、法律、規制、慣行などの隘路による場合、世論の中に強い反対がある場合、国などの資金提供者がチャレンジに熱心でなくなった場合などである。

これらのハードルの克服が十分でなく、一時停止している研究開発は決して少ない数ではないはずであり、条件を整えば飛躍できるよう用意しておくことが肝要である。そのためには、まずはイノベーションの候補としての前向きの評価をしておかなければならない。

第三は企業の役割である。イノベーションは、少なくとも最終段階においては、先進的な企業の力によるところが大きい、出来ればリスクの大きい早い段階からの産学（官）の共同作業が望ましい。企業のチャレンジをより可能にするような環境整備も大きい課題である。

3. 人材育成についての補足

人材育成は第三期基本計画の大きい柱であり、多くの施策が盛り込まれている。内容の説明は基本計画に譲りここでは述べない。また知的財産推進計画も人材を重視している。ただしその中で知的財産の創出に係る人材の育成は、とくに速成には向かない。若者の将来設計、したがって社会システムの動向に密接に関わっているからである。それだけに識者の危機感も大きい。

石坂公成先生（免疫学者）は次のように述べている²。“私が日本に帰って感じたことは、日本人の考え方が35年前とは変わってしまったことだった。学生たちは自分が将来何をするかよりも、有名な学校に入ることや安泰を第一としているし、エリートたちは名をあげることやほめてもらうことを目的として生きてきているように見える。”

丸山真男先生は、“「秀才バカ」というのは情報最大、叡智最小の人で、クイズには最も向いているかもしれないが、複雑な事態に対する判断は最低です、”と述べている³。

森嶋道夫先生（経済学者）は、“日本が必要としているのは記憶力に優れた知識量の多い、いわゆる博学の人ではなく、自分で問題を作り、それを解きほぐすための論理を考え出す能力を持った人である、”と述べている⁴。

森嶋先生は、2050年に焦点を合わせ、“日本は工業国の上位グループに留まることは出来ないであろう。そしてその国際影響力は目立たなくなり、取るに足らないものとなるであろう、”と述べている⁵。その背景は教育にあり、とりわけそれをもたらした日本人のエートス⁶の第二次大戦後の崩壊にあると指摘している。

さて、どうしたらエートスを再構築できるであろうか。もちろん筆者の手に余る課題であるが、次項にその一端を述べてみたい。

4. 知の創造を尊ぶ気風

知的財産の創出は、知の創造を尊ぶ気風に大きく依存する。第二次大戦後のとくに高度成長期からから80年代までの成功は、この気風を希薄にしてきたように思えてならない。福沢先生は、前述の著書の中で、このようなわが国の動向を、あらかじめ予想していたように痛烈に批判し、併せてわが国の進路を示していたが、われわれはなぜかその教えを忘れてしまったようである。以下その一部を紹介する。

“故に文明の在るところを求めんとするには、先ず其の国を制する気風の在る所を察せざる可からず。”さて文明とは何かというと、“文明とは結局、人の智徳の進歩と云うて可なり、”と述べている。智徳という熟語の意味は、丸山先生の詳細な解説⁷⁾によるべきであるが、端的に云えば、智は知恵であり、徳はモラルのことである。また物質的な安楽の追求だけが文明ではない、ということでもある。

これまでに紹介してきたいわば警告は、明治期にあった人種差別批判に係る議論とも奇妙に一致する。19世紀半ばに刊行されたJ. A. ゴビノーによる人種不平等についての考え⁸⁾の一部を紹介する。

“黄色人種は実際的な人間で、夢を見ることなく、理論の妙味を解さない。発明することはほとんどないが、役に立つものを評価し、採用する能力はある。かれらの望みは出来るだけ安楽に快適に暮らすことである。(中略)しかしながら社会そのものを創り出す人種ではなく、ましてやその社会に生气と美と活動を与えるものではない。”

要するに白人、とりわけアーリア人は優れており、日本人を含む東アジアの人種とは異なるということである。

当然のことながら、森鷗外など明治の知識人は猛反発した。

しからばわが国の現状はどうであろうか。ゴビノーの指摘は的を射ていたのであろうか。もちろんそう思いたくない人が多いに違いない。あるいは前述のようなわが国の先人の教訓や警告を忘れてしまったのであろうか。現状はともかく、筆者は、知の創造を尊ぶ気風を必ずやわが国においても醸成できるものと信じて疑わない。いずれにしても21世紀の日本人に課せられた大きい課題ではないだろうか。

5. わが国の知的財産戦略と共に

小泉総理ならびに関係者のご尽力で、知的財産戦略は4年前から新しい時代に入った。毎年の推進計画は様々な課題にまさに次から次へと挑戦しているが、いまだ途上である。知的財産戦略が進めば、新たな課題が待ち受けている。本稿はその一端であり、一助になれば幸いである。

注)

- 1 丸山真男「文明論之概略」を読む(全三冊) 1986, 岩波新書
- 2 石坂公成 私の履歴書, 日本経済新聞 2005-3-31
- 3 前掲注1
- 4 森嶋道夫 なぜ日本は没落するか 1999, 岩波書店
- 5 森嶋道夫 なぜ日本は行き詰まったか 2004, 岩波書店
- 6 民族や社会集団に行き渡っている道徳的な慣習・雰囲気(広辞苑)
- 7 前掲注1
- 8 平川祐弘 和魂洋才の系譜 1992, 河出書房新社